

Title	福島, 3・ 11 報道の現場
Sub Title	
Author	橋本, 亮
Publisher	慶應義塾大学メディア・ コミュニケーション研究所
Publication year	2013
Jtitle	メディア・ コミュニケーション : 慶應義塾大学メディア・ コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.63 (2013. 3) ,p.139- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	メディア・ コミュニケーション2013 No.63抜刷
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20130300-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メディア・コミュニケーション 2013 No.63 抜刷

福島, 3・11報道の現場

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所

福島，3・11 報道の現場

橋本 亮



▶ はじめに

食品の放射線量を測る機械の前で、白衣の係員を何人もの記者やカメラマンが囲んでいる。係員の手には地元で収穫したコメが入ったビニール袋。出荷の可否がかかる大事な検査だ。しかし、さほど緊迫していないように見える。カメラマンの一人は「もっと手元が見えるように」とでも伝えているのか、係員に指をさしながら笑顔だ。係員も「またですか」と言いたげに苦笑いしながら、コメを測定器に入れようとしている。

2012年6月28日、「福島，3・11 報道の現場」と題してメディア・コミュニケーション研究所の公開講座に立ち、東日本大震災と福島第1原発事故から半年間、福島で報道に当たった経験を話した。その冒頭に示したのが、上記の光景を撮った写真だった。

測定器に検体を入れる場面は後から撮り直しが利かない。我々は係員にせがんで何度も同じ動作を繰り返してもらい、色々な角度から撮影した。入れる瞬間に止まってもらった。検体を持つ手を変えてもらったりする中で、笑いも起きた。震災の年、8月のことだ。

写真で示したかったのは、震災と原発事故の報道は緊張を前面に出した現場の切り取り方をするが、当然弛緩する面もあることだ。もちろん被災地の状況はいまだに深刻だが、日常生活や取材現場で悲観する気配だけが流れていたわけではなかった。

震災と原発事故の報道に当たった記者の講演という、他の記者と違う現場を踏んだり、ネタを取ったりしたような、いわば一旗あげた記者が普通は取り上げられ、緊張した状況を伝えるだろう。特段の成果もない記者として講演することになり、写真のような現場があると伝えたいと思った。すなわち取材現場の実情や実際の意識を、おそらく反感も生むだろうが、正直に表現したいと思った。

本稿はその意図による講演の内容と、大石裕教授や聴講者の質問を受け改めて考えたことを記録した。

震災報道は、大本営発表といえる当局重視の報道だったのではないかとしばしば批判され、報道機関の横並び意識が根強く取材活動が鈍ったという問題もあったといえる。報道機関や記者を代表できる立場ではもちろんなく、これから書くことは一人の記者の経験という枠を出ないが、こうしたことを考える材料になればと思う。

▶ 1 3・11 以前

福島支局に着任したのは2008年5月、入社直後だった。震災までの約3年間、主に事件や事故の取材を担当したが、大ニュースを報じたのは数えるほどの平穏な土地で、むしろ「まちねた」と呼ばれる地域活性の取り組みや独特な風土の取材にやりがいを感じる職場だった。全国的な話題になるのはそれこそ原発だった。2010年9月に福島第1原発で

プルサーマル発電が始まったが、それに至る過程も含めて大きなニュースになった。

原発立地地域は「まちねた」もほとんどなく、特殊な地域という印象だった。今でこそ、立地地域の住民が原発をどう考えているか報じられもするが、事故以前は住民取材しようとする発想に至るまでの原発に対する問題意識はなかった。安全神話の中にいたと痛感するが、信じ込まされていたというのではない。疑わなかった、当時の空気だった、というのが実情に合っている。

一方で、東京電力は透明性を高めようと情報開示に熱心だった。些末なトラブルでも担当者が記者室に来て説明した。たいがい放射性物質が流出する危険はないと伝えられ、記者の緊張が緩んだ。ニュース価値判断の拠り所だった常套句だが、裏付けを問い質す知識は持っていなかった。そして「よく分からない」原発トラブルだから、取材はルーティーン化した。他社の動向を見ながら、記事にするか、どのくらいの扱いにするか考えた。

地元目線で危険を感じないと迷惑施設への強い批判はできないが、知識と意識の乖離というような状況があった。福島にいる記者は原発がトラブルを繰り返すと東電担当者に改善を強く迫ったり、批判記事を展開したりした。しかし、たとえば東京本社科学部にいるような専門記者と比べると知識の差は大きく、掘り下げた質問や議論はできなかった。東電から説明を受けてたいしたことはないと思っていたトラブルについて、科学部の専門記者から重大な事故だと指摘されたこともあった。

もっとも、今でこそ原発は安全ではないという一般認識があるが、事故以前は放射性廃棄物の最終処分場やプルサーマル発電などの逸脱が問題になるくらいだった。もちろん当時は原発に反対する団体もあり、報道機関に問題を示そうとする情報提供があった。しかし、記者は真剣に取り合わなかった。論拠が正しいと判断できる材料が見つけれなかったからだ。どんな施設でもけちをつけることはできるし、そのための情報提供は多い。正直、取り上げ始めたらきりが無い。

公開講座で大石教授は「警告を発さないといけないのはジャーナリズムの使命だが、意見の分布から外れた発想は紙面に載せづらい。日常的な出来事を報道するジャーナリズムにとって、(問題の)ふたを開けるのは深刻な事件が起きないと難しい」と話したが、実感する。怠慢といえるかも知れない。しかし迷惑施設は山ほどあるし、可能性がごく低くとも危険を及ぼすとされるものも多い。政治問題も社会問題もたくさんある。そのいずれのふたを開けるかは時流によるし、記者の属人的な問題意識による。

▶ 2 3・11 直後

東日本大震災を仕事に向かう車の中で経験した。福島市の市街地は割れた窓ガラスが散乱し、信号や照明が消えた。職場の記者室がある県庁は機能不全になり、県は臨時で災害対策本部を近くの建物に設営、記者は廊下に陣取って取材した。県は報道機関にも公開する幹部会議を随時開き、被害状況を確認した。津波、ダムの決壊、国道や建物の崩落など被害の甚大さが次第に明らかになる。パソコンと公衆電話で被害状況を会社に報告する作業に追われたが、余震も激しく、当時は誰もそうだが恐怖が付きまとった。

原発の状況も会議で報告された。原子炉が冷却不能になっていると明らかになり、次第に住民の避難も議題になった。東電が報道機関への会見を開き始め、冷却機能を回復するための計画が説明された。県幹部が強い口調で計画の遂行を迫ったりしたことを思い出す。

計画はうまくいくように感じていた。思い返すと理由の一つに、東電からの一方的な情報しか得られなかったことがある。通信機器が機能しなかったり作業に追われたりして、

計画にどんな困難が伴うか取材できなかった。テレビやラジオ、インターネットから情報を得ることすらままたまなかった。話は前後するが、新聞も1週間ほどは入手困難だった。そのため原発の状況がなかなか把握できず、何が重大な情報か曖昧になった。会見で聞いた内容を会社に伝えると「大変なことだ」と反応されることが多々あった。

初動で当局や東電のデータ取り扱いに不備があったことが後に明らかになったが、当時もっと知識や情報がある中で取材すればデータを出させられたのかも知れない。もっとも、当時を振り返ると県や東電の現地対応者がデータを意図して隠す余裕があったとは感じない。それほど矢継ぎ早に会議と会見があり、情報を開示していた。

3月12日早朝、津波被害の状況を報道するため、福島空港からヘリコプターに乗った。記事や写真、映像で伝え切れない、視界が及ぶ範囲の海沿いが全て海にのまれている光景に、抗えない自然を実感した。飛行機がミニチュア模型のように流され、港のところでガスタンクから火の手が上がり黒煙が広がっていた。ビルの屋上で人々が助けを求めて手を振り、普段は人でにぎわう商業施設に流されてきた車が積み重なっていた。

一夜明けての被災状況を伝える記事は号外用だった。機上で原稿にまとめ、空港の公衆電話から会社に伝えた。そのときは高揚めいたものも感じていた。

しかし帰路につき、道路の崩落による長い渋滞に巻き込まれる中、機上で見た光景を思い返し、記者の立場を離れて、日常が変わったと寒々しい心持ちになったことを覚えている。

災害対策本部に戻ると原発が危険な状況になっていた。炉心溶融が差し迫り、身の安全への意識が頭の中にこびり付くようになった。

前段として2010年2月、チリ大地震に伴い日本各地で起きた津波があった。このときに三陸海岸で危険な目に遭う記者もいて、会社で震災対応を話し合う機会が設けられた。地震や津波取材の注意喚起があり、身の安全への意識を持つようになった。震災の直前、9日に三陸沖で強い地震があったことも、身の安全への意識を改めて呼び起こしていた。

「まずは身の安全」と考え、原発周辺や避難指示区域で何が起きているか取材しようと力を割く意識は、起こりすらしなかった。思考停止になっていた。そのとき現場で起きていたこと、避難する住民の状況を記録できなかったことは、この先どう評価されるのだろうか。その後の取材で状況を再現する記事は出しているが、使命は果たしているだろうか。

10万人を大きく超える長期避難者を生む被害になるとまで想像できなかったため出足が鈍ったのも事実だ。海外では早々に危機と報じられ、県外から見ると福島は危ない環境と写ったようだが、たとえば福島市では事故直後も住民は外を出歩いていたり、さほどパニックにならなかった。それは安心情報を流す政府やにわかに出てきた専門家の楽観情報による判断ではないと感じる。

当時は津波被害の方が大きく、放射性物質の目に見えない被害より切迫していた。会社も岩手や宮城には記者を増員していたが、福島への記者の投入はしばらくなかった。事故から数日経って放射性物質の影響の大きさが徐々に明るみに出て、福島から発信するニュースが急増した印象がある。

3月26日に原発から約30キロのいわき市に入ってルポルタージュ取材をした。このころは、放射性物質の拡散が疑われる地域での取材に会社は慎重だった。被ばくの心配があったからだ。現状から見ると及び腰で記者として恥ずべきと批判されるだろうが、それは被害がなかったための結果論ともいえる。もっとも、この取材に踏み切った一因として、他

社がいわき市や同じく約30キロの南相馬市に入ったルポを掲載したことはあったと思う。原発付近での取材は、報道機関同士が見合いながら進んでいった面もあった。

いわき市は海沿いの地域で、津波被害で住む場所を失った人たちが、原発事故による被害を避けるため政府から屋内退避を呼び掛けられた人たちが避難所に寝泊まりする状況もあった。ただ、多くの住民は放射性物質に気を遣いながらもそのまま暮らしていたようだった。当初は原発に近い危険な場所との風評で支援物資が届けられないこともあったようだが、このときは風評を問題に思った支援者たちがすでに続々と入っていた。

避難所を取材したときには、避難区域の人が「家に帰る」と主張して、ほかの人が「それはだめだ」と論ずる場面があった。「ハゲワシと少女」の写真から、危険にさらされている人を目の前にしたとき記者としてどうすべきかを考えることはあったが、思えばそういう状況だった。しかし、何も考えなかったし、区域に入るのを止めもしなかった。そこに置かれて切迫感はなかった。放射性物質は目に見えないし、どんな被害が起きるかも分からなかったからだと弁明はできる。しかし正直なところは、取材しないといけない、仕事に穴を開けてはいけないという意識が強かったから、余計なことを考えなかったということだ。

▶ 3 日常化する現場

4月になると、原発は徐々に冷却機能を回復してきた。避難区域以外はそれなりに日常を取り戻し、たとえば福島市は多くのスーパーやコンビニ、飲食店が再開した。当局の要人が視察に入る機会が増え、風評被害を受けていた県産品のPRに取り組んだりした。県や東電は会議や会見の回数を減らし始め、震災直後の緊迫感はある程度薄れていた。

このころ、当局が避難区域を報道機関に公開する動きが出てきた。福島県警は津波による行方不明者を原発付近で捜索する状況の写真を公表、震災から1カ月の節目には県警幹部も捜索現場に入り、同行取材も許可した。この機会には一部報道機関が参加し、それまで原発近くの取材を避けていた報道機関がせきを切ったように避難区域に入るようになった。ただ、被ばくの影響がより深刻とされる若い記者や女性記者の取材は依然、避けられた。

取材の焦点は東電の事故対応から、政府や県の対策や復興への取り組みに移っていった。新たな避難区域の指定、食品の出荷規制、除染計画策定などの報道で、時々刻々と変わる原発の事故状況を報じるのとは違い、「抜き」が紙面を飾るようになった。記者は担務が割り振られ、それぞれのテーマで主に当局の動きを追うようになった。

特に飯館村の全村避難は大きく扱われた。当初は避難対象ではなかったが高線量の地区があると分かり、5月中旬から村民6千人超の避難を始めた村だ。各報道機関は記者やカメラマンを毎日交代で入れ、村の幹部会議や地区ごとの集会に押しかけたり、テーマを決めて村民に直当たりで取材したりした。

顕著だったのは、各社が同じ話を追いかける報道だった。「村民がいなくなるまで店を続ける」と決意したある飲食店をこぞって取材したのが象徴的だ。店の物語は全村避難が済むまで取り上げられた。さらに、福島市に移っての店再開が「抜き」の対象にまでなった。

被害の広がりや進行しているからか「まちねた」さえストレートニュースになるほど、福島はどの地域でも、主体が何であっても、大小さまざまな動きがあって「落とす」ことがないよう必死になった面があった。もちろん各社が同じ話を追いかけるばかりではなく、独自の問題意識から取材対象との関係を掘り下げもした。そこには関係を作って次のストレートニュースの端緒を得たいという意識もあった。

ところで、飯舘村は何度か取材したが、報謝線量が高いとされる地区に行くと確かに線量計測器が反応した。しかし、このときも村民に早く避難するよう呼び掛けることはなかった。不安にさせることに責任が持てず、村民たちが暮らすのを横目に、放射性物質の影響を受けないよう足早に村を後にしていた。

前段のいわき市と比べると切迫した状況ではないかも知れない。だが、このころは情報も多く住民も知識を身に付けていたとはいえ、内部被ばくがどう健康被害に結び付くかは分からないし、不安なのは変わらない。ただちに害はない、という政府の表現が世間で諦観をもって扱われていたが、記者はその表現を追認して被災者に接したし、報じた。

食品や校庭の放射線量が特に話題になったが、政府が定めた基準を覆すような、誰が見ても正しいといえる根拠のある提言はなかった。記者は政府の基準を追認したが、それはエリートパニックと呼ぶべきものかも知れない。被災者を不安にさせたり、風評を生んだりする情報から、記者は目を背けた。ただ、ここでも「ふたを開けるのは難しい」。進行形の問題であり、混乱を生む結果になることも望むところではない。

放射線量が高い地域で住民避難を進めるのと並行して、居住環境の線量を低減させる除染も進められた。自治体ごとに側溝や民家を水で洗い流し、山林まで手掛けるとする計画を練った。土壌の放射性物質を吸収するヒマワリを多くの場所に植えたりした。

記者はこうした取り組みに批判の目を向けなかった。被ばくの不安をかき立てる報道に加え、復興への取り組みに水を差すような報道も控えていた。風評を生まないよう細心の注意を払うようにもなり、「フクシマ」とか「汚染」という言葉が避けられた。

当局による復興への取り組みは、原発事故の収束や、避難区域がどうなっていくかの見通しが付かない中で進められた。おそらく被災者が感じていたのは「無視されている」とか「そんなに簡単じゃない」という怒りや呆れだろう。おそらく書いたのは、きちんと把握できていないほどに、当局の取り組みに偏って取材していたからだ。被災者の声は記事中で少し触れるくらいで折り合いを付けようとしていた。

原発の冷却機能が安定し急変する恐れがほとんどなくなった頃から、政府は避難者の一時帰宅を企画し、同行取材も定期的に許可した。事故直後は「身の安全」意識から近寄らず、また4月22日に警戒区域になって以降は法律で罰則もあり入れなくなった場所だ。

「大本営発表」と批判される大きな一因が、こうして原発に近づかずに報じる姿勢だった。フリーの記者らが事故直後に立ち入り報じたことが、そうあるべきと評価されもした。しかし、住民に避難を呼びかける側の報道機関なのに、記者は入るという特権的なことはすべきでない、という論理が主張されたりする中で、避難区域の取材は簡単ではなかった。

5月26日に区域内を取材する機会がまわってきた。政府のバスから見える光景は震災直後のままだった。それに加え、市街地で店々のガラスが割れて散らばっている中を放たれた牛が走り、津波で真っさらになった沿岸部から遠くに福島第1原発の排気筒が見えるような、普通は考えられないような光景が広がっていた。

しかし、個別にテーマを決めて取材することは許されなかった。場所と時間を決めて同じ景色を見て同じ被災者から話を聞く作業。結果、記者ごとの独自色が出ることはなく、どの報道機関が出す話も目新しいものはなかった。

そうした取材が繰り返されるうち、避難区域に入ることはニュースではなくなった。記者の意識は、取材機会が設定されたからとりあえず参加するというものになっていった。

そしていつしか、遠かった避難区域の取材はルーティーンワークになっていた。

▶ おわりに

記者の当局重視と、横並び意識に関わる経験を特に取り上げた。批判の色は濃くしているが、当時を悩み疑っている正直な思いで書いた。

3・11をめぐる報道でなくとも、こうした点を指摘できる状況は多々あるだろう。そして本稿で見てきた事象も通常通りの報道で、取り立てて批判すべきものではないといわれるかも知れない。記者が当局の取り組みを追認して報じていく中で何か問題がないか探っていくことや、問題を明かそうとしない当局に記者同士が連係して圧力をかけることが、権力監視になる面もあるからだ。当局の取り組みからひとり逸脱して報道しても、社会の利益と乖離する、という実感もまたある。

しかし、原発事故と放射性物質の放出という未知の状況におかれ、記者は意図してかどうかに関係なく、取材や報道に歯止めをかけた部分があったのは見てきた通りだ。ひとつひとつの出来事について、後から見返すともっと違うやり方があったように感じる。

3・11から半年間、記者として権力批判する使命、記録する使命を最も発揮すべき現場にいた。それも元からいた地域で起きたことで、福島に愛着がある点で、報じることへの意識は外から来る記者とはおそらく違うものだった。そしてまた、属人的な興味で専門を磨いていける記者という立場にあって、原発をはじめ福島に関する知識を蓄えておくことだってできた。福島の記者としての意識も知識もある上での報道が、一旗あげるための報道より正当で、求められ、何かを生み出せるものだった。しかし、意識があるからこそその踏み込んだ取材はできず、知識があってもその深い記事は出せなかった。

もう一度あの場にいたらこんな報道ができるのに、と思う。しかしそれは叶わないし、できるかどうか分からない。そうすることで状況が変わるかといわれると答えはない。だから許してほしい、というのではない。しかしできることは、あのかの問題をさらけ出すことであり、それを次に生かせるようにすることしかない。

橋本 亮（共同通信社）